ワークショップ「中国近現代史研究の最前線」

日　時：2014年５月30日（金）18：00～20：00
テーマ：「中国近現代史研究の最前線」
司　会：高橋　伸夫（慶應義塾大学）
報告１：「中共党史と共和国史研究の最新動向」
　報告者：楊　奎松氏（北京大学・華東師範大学特聘教授）
報告２：「民国史研究の現状と課題」
　報告者：羅　敏氏（中国社会科学院近代史研究所副研究員）
討論兼通訳：段　瑞聡（慶應義塾大学商学部教授）
場　所：東館６階　G-SEC Lab
使用言語：中国語、日本語逐語通訳

今回のワークショップは、近年世界中から脚光を浴びる冷戦史・中国現代史研究者の楊奎松氏と、中国国内の新鋭近代史研究者羅敏氏を招き、開催する運びとなった。両氏は、2006年に公開された『蔣介石日記』に精通しているだけでなく、中国内外で公開された多種多様な資料をも同時に駆使して、目覚ましい成果を発表してきた。今回のワークショップでは、資料が一時に多量に公開されたことをうけて、中国における近現代史研究の最新動向について報告を行った。

まず羅氏は、『蔣介石日記』（スタンフォード大学フーバー研究所所蔵）、『蔣中正総統事略稿本』（台湾国史館）など蔣介石を中心とする新資料とそれらを利用した最新研究、民国期の政治史研究における新たなアプローチ（社会史、文化史、ボトムアップの視角）を紹介した。現在中国大陸で最も注目を集めているテーマは辛亥革命前後における歴史の連続性と政治体制の転換であり、これはかつて深く浸透した革命史観とは全く異なる新しい歴史観の形成と関係しているという。新しい歴史観とは1980年代以来「近代化史観」の影響を受けて革命史観から脱皮したもので、北洋政府・北京政府による近代的国家制度の構築や外交努力を肯定する傾向がある。これらの動きは中国近代史における連続性の強調として特徴づけられる。

楊氏は近年の歴史資料の公開状況と各種資料の特徴や所在を詳細に紹介した。たとえば旧ソ連、アメリカなどの公式文献の公開、上海交通大学による県レベルの档案（公文書）の収集、華東師範大学による単位档案と個人档案の収集、南開大学による根拠地資料の収集、山西大学による村資料の収集など、日本の研究者にとっては新鮮なものが数多く披露された。こうした内部資料とくに単位・個人档案は、社会側の状況と政治に対する反応についての新たな歴史事実の発掘に繋がると、その意義が説明された。最近のボトムアップの視角の流行の問題点と、以上紹介された資料の公開との関連性も指摘された。氏は末端重視の偏重は克服すべきとし、そのために近現代史の連続性と一貫性の視点が欠かせないと主張した。

討論と質疑応答では、中国における資料の利用方法や档案法による規定、研究成果の発表の制限がより詳しく説明された。また現実政治が研究に対する影響や、民国史、国民党史、台湾史、共産党史、共和国史などのワードの使い分けとそれぞれのニュアンスの違い、中国近現代史を専門とする日本の学者の課題と可能性について、討論者とフロアーが問題提起をした。